会報

史学研究会例会

昭和四〇年一二月例会

十二月四日（土）午後一時

於　京大文学部陳列館第二教室

九州唐津・飯塚弥生式遺跡調査報告

——九州大学の調査に参加して——

樋口隆康氏

近藤喬一氏

昭和四〇年三月に行なわれた福岡県飯塚市弥生式集落址の発掘調査（九州大学）及び昭和四〇年十一月に行なわれた佐賀県唐津柏崎貝塚・宇木汲田貝塚・亀棺墓地・中原亀岡墓地の発掘調査（九州大学等）について、スライドを使用してその概観を報告された。

昭和四十一年五月例会

五月七日（土）午後

エクスカーション〈青葉の亀岡をさぐる〉

臨地講師　上田正昭氏

篠村八幡・亀岡城址・大本教本部・穴太寺・小幡神社をバスにて巡回した。

六月例会　六月四日（土）午後一時より

於京都大学文学部第一講義室

ガンダーラ美術の発掘及び研究（スライド使用）

小谷仲男氏

（発表内容は論文として本誌五〇巻一号に掲載予定）

十月例会　十月一日（土）午後一時より

於京都大学文学部第一講義室

エッシュのある村（スライド使用）

——北西ドイツ農村の歴史地理学的考察——

浮田典良氏

北西ドイツのヴェストファーレン低地は、ヨーロッパにおける代表的な散居集落の分布地帯として知られるが、純然たる孤立荘宅が卓越するのは、ミュンスターラント中央部に限られ、その他では、排水のよい微高地に位置した「エッシュ」Esch と呼ばれる古い耕地を中心に、三〜一五戸の大きな農家がグループを形成し（ミュラ・ヴィレによりドルッベル Drubbel と命名された）、このような農家群が発生的にも古い起源を有し、現在もなお基本的な居住様式をなしている。

このようなエッシュおよびドルッベルについての既往の研究状況について簡単に述べたのち、ミュスター北郊のギンプテ Gimbte 村における事例研究の成果の概要を報告した。

この村の村域は一八二〇年代まで、狭長縞状地条より成る「エッシュ」と、屋敷周りの「カンプ」と、共有の粗放的放牧地「ハイデ」に分かたれいた。ハイデは一八三一年に規則正しい区画に分割されて私有化し、その後大部分は植林され、二〇世紀に入ると農地（畑または牧場）にかわった。エッシュの狭長縞状地条は一八八八年の耕地整理・統合の結果、大面積の整然たる方形の耕地にかわり、それまで多くの個所に分散していた各戸の経営地は、少数の個所に集団化した。このような土地利用および耕地形態の変化に対応して、村落の構造がどのように変わってきたかは、きわめて興味ある問題である。一八世紀までの本村の住民は、二戸のシュルツェ（村役人的）、一三戸のコロヌス、九戸のケッター、約二〇戸のほとんど土地を持たぬ住民から成っていた。ハイデの分割に際して配分された土地は、シュルツェが最も多く、コロヌスがそれに次ぎ、ケッターはコロヌスの三分の一強、その他はさらにその半部強にすぎず、それまでの土地所有上の階層的な差が、

より拡大された形で固定化した。このような状況は現在にまできわめて明瞭な形で影響しており、シュルツェおよびコロヌスの流れをひく農家が今でも二〇～四〇ヘクタールの標準的中農層を、旧ケッター層は五～一〇ヘクタールの小農層を、その他は零細兼業農家ないし非農家（かっての隷農的日傭い農）を形成している。

なお報告内容の詳細は、『人文地理』一九巻二号（一九六七年四月刊）に掲載される予定である。

（浮田典良）

エリザベス朝の性格について

植村雅彦氏

（発表内容は論文として本誌五〇巻一号に掲載予定）

学界消息

日本考古学協会　第三二回　総会

四月二九日～五月一日

於　国学院大学

北海道白滝服部台遺跡の調査　杉原荘介・戸沢充則

栃木市星野町遺跡の下部ローム層中より出土した硅岩製石器　芹沢長介

静岡県磐田市池端前遺跡略報　麻生優

三河国加生沢旧石器時代遺跡　紅村弘

北海道釧路市東釧路遺跡調査概報　金子浩昌・山口敏

河野本道・沢四郎

宮城県塩竈市桂島貝塚の調査　加藤孝・後藤勝彦

東京都町田市山崎遺跡の第Ⅱ・Ⅲ次調査　久保常晴・関俊彦

新島田原における縄文・弥生時代の遺跡　杉原荘介・大塚初重・小林三郎

神奈川県金子台遺跡の配石遺構　神沢勇一

修善寺池の本遺跡――縄文早期の住居址について　笹津海祥・白石竹雄

刈谷市重原本町中条貝塚の調査　加藤岩蔵・斉藤嘉彦

愛知県渥美町保美貝塚第二号貝塚の調査　久永春雄

滋賀県近江八幡市元水茎町遺跡調査概要　西田弘・水野正好

兵庫県西宮市甲山石器原材採石地の調査　石野博信

埼玉県上尾市尾山台遺跡概報　三友国五郎・柳田博司

登呂遺跡水田跡の発掘調査について　長田実・望月董弘

加賀国猫橋遺跡　上野与一・太田和夫

滋賀県大中の湖南遺跡発掘調査概要　水野正好

大阪府河内市瓜生堂遺跡　荻田昭次・藤井直正

尼崎市田能遺跡第一次調査概要　村川行弘

香川県善通寺市我拝師山出土銅鐸　石川巌・松本豊胤

岡山県小田郡矢掛町岡山遺跡　間壁忠彦・間壁葭子

宮城県松山町亀井囲横穴群第三次調査概要　氏家和典・加藤孝

栃木県野木町所在の土師集落について　大和久震平・辰巳四郎

塙静夫・中村紀男

茨城県新治郡玉里村舟塚古墳第一次発掘調査の報告　大塚初重・小林三郎

茨城県馬渡遺跡の埴輪窯址と工房址について

大塚　初重・小林　三郎
下総国八代玉作の攻玉技術とその意義　寺村　光晴
石川県三浦遺跡の調査　金山顕光・高堀勝喜・浜岡賢太郎
橋本澄夫・吉岡康鶚
福井県鯖江市の王山・長泉寺山古墳群　斎藤　優・上野与一・椙山　林継
大和新沢千塚千塚第四次調査概報
末永雅雄・森　浩一・伊達宗泰・網干善教
藤原光輝・石部正志・山田良三・堀田啓一
香川県善通寺市宮ガ尾絵画古墳　松本　豊胤
カマド梯とカマ形木梯古墳の新例——大阪府和泉市信太山丘陵北端の古墳群——
森　浩一・田中　英夫・石部正志
堀田啓一・白石太一郎
鹿児島県出水郡小浜崎古墳群の調査　池水　寛治
余市町大崎山遺跡　大場　利夫
陸奥国古代史序説　小岩　末治
陸前利府村菅谷道安寺横穴古墳内経塚　加藤　孝
群馬県大田市辻小屋古窯址の調査　倉田　芳郎・坂詰　秀一
愛知県知多郡大知山・旭大池古窯址群
広瀬　栄一・杉崎　章
越前古窯址群の調査　檜崎　彰一・斎藤　優
水野九右衛門・石川考古学研究会
昭和四〇年度飛鳥京跡の発掘調査
末永雅雄・島田暁・網干善教
難波宮址最近の発掘調査　山根徳太郎
広島県世羅郡青水古窯跡の調査
坂詰　秀一・野村　幸希
一九六五年度草戸千軒町遺跡の調査
松崎　寿和・村上　正名
山口県周防鋳銭司遺跡の調査
斎藤　忠・小田富士雄
平城宮東南隅の調査概要　河原　純之

日本オリエント学会　第八回大会
六月廿五日〜廿七日
於・北海道大学クラーク会館
〈公開講演〉
アラブ人の商業活動　前嶋　信次
日本における古代オリエント研究の発達　三笠宮崇仁
〈研究発表〉
ウル第三王朝時代における農業生産　前川　和也
古代イスラエルの奴隷について　高橋　正男
預言者ホセアと北イスラエル王国　石井　良博
「マルコ福音書」における地理的表象——ガリラヤ問題をめぐって——　土屋　博
「コロサイ人への手紙」におけるキリスト論について　中川　秀恭
後期イスラムの二重構造　加賀谷　寛
イルヤン国の「王道」　本田　実信
ナスィール・ウッ、ディーン・トゥースィーの生涯と業績　黒柳　恒男
十五世紀のオスマン・フィレンツェ交渉史の一側面　渡辺　金一
「タキーブゥ・バフリエ」の著者ピリー・ライスと世界古地図について　三橋富治男

キリスト教史学会　第十七回大会
八月廿六日〜廿八日　於・北星学園
北海道に渡った最初の宣教師アンジェリスについて　A・シュワーデ
蝦夷の金山とキリシタン　五野井隆史
正教会の北海道開教　海老沢有道
C・H・ヤーベンター夫妻の根室伝道　佐々木敏郎
北海道における刑務所伝道　福島　恒雄
ピルグラム・マルベックの契約思想　小林　昌明
日本最初のキリシタン墓碑・踏絵　竹村　覚
セルヴェトゥス処刑の理由について　相沢　源七
ベーダについて　朝倉　文市
鎖国時代におけるキリスト教知識の導入——特に蘭学について——　池田　哲郎

武蔵国におけるキリシタン史――芝塚越のマリア観音を中心に――　矢島　浩
アウグスティヌスとマニ教について　宮谷　宣史
キリシタン物の文体　柊　源一
「用無遺稿」のことなど　伊沢平八郎
日露戦争と日本ハリストス正教会　波多野和夫
太平天国の宗教についての一考察　深沢　秀男
軍人伝道に関する研究（報告その三）　峰崎　康忠
妙貞よりバチカン第二公会議へ　田北　耕也
〈公開講演〉
ルイス・フロイスの日本報告　松田　毅一
ローマ帝国の没落とキリスト教　秀村　欣二

北大史学会　昭和四十一年度大会
九月十日・十一日　於北海道大学図書館
〈公開講演〉
オリエント史をめぐる二・三の問題　板倉　勝正
北海道開拓精神について　榎本　守恵
〈研究発表〉
平安時代における浄土思想　速水　侑
米国憲法における Separation of Powers　奥村　博司
ティムールの歴史について　加藤　和秀
高校日本史教科書の問題点　林　恒子
アメリカ史における Unilerdanism の位置　大山　綱夫
中国古代帝国の権力構造　尾形　勇
十八世紀初頭におけるイギリスの労働問題　荒川　邦彦
明治初年北方問題をめぐっての政治的動向　原田　一典

委員会だより

◇　四九巻、ようやく六号をお届けすることができるようになりました。本年一号の本欄にて、刊行のおくれを「一・二号のうちに必らず挽回」とお約束しておりますが、ついに実現をみませんでしたこと、深くおわびいたさねばなりません。むろん委員会としてその努力を放棄したわけではさらさらありません。今しばらくの時間をお貸し下さい。

◇　本号より、新しく「展望」というタイトルが登場しました。西川氏の論考、御一読いただければわかるように、海外及び京都の遺跡保存の事例を紹介・分析しながら、積極的に保存修景計画について提案を行なっています。本誌には今までになかった新しい論考でありますが、私どもの学問を進めてゆく上で、こうした問題も多々あるわけです。論文・研究ノート等々とともに、各位の御寄稿をお待ちいたします。

◇　本誌に対して、今年も文部省研究成果刊行費補助金の交付を受けています。関係各位の御尽力に感謝いたします。ところで、助成金は会員各位の会費完納を前提とし、なおかつ赤字分につき助成を申請している訳で、会費赤字の方は至急にご納入下さい。また、合せて一カ年分の前納をお願いいたします。

一九六六年十一月廿五日印刷
一九六六年十一月一日発行　定価三〇〇円
史林（第四九巻第六号）
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
発行所　史学研究会
振替京都五一五五番
発行人　理事長　小葉田淳
京都市下京区西七条御所ノ内中町五〇
印刷所　中村印刷株式会社